

## コザ・ビジネスセンター通り周辺における 墓地の立地とその特徴

岡本 啓介\*

### I はじめに

#### (1) 研究の目的

沖縄県における葬送儀礼や墓の形態は、日本本土とは異なり、亀甲墓や門中墓と称される独特な景観をつくりあげている。祖先崇拝の慣習が現在でも色濃く残る沖縄では、その表象として墓の空間が、一族の強固な血縁関係を再確認する場所として機能しているのである。その特徴のひとつとして、個人が墓を所有していることが挙げられ、戦後都市計画や区画整理事業の際に、計画を阻害する要因となってきた。

例えば、今回の研究対象地域となるコザ・ビジネスセンターとはほぼ同時期に開発された那覇市の牧志大通り（現・国際通り）では、周囲に散在する墓地が拡張工事の妨げとなり、移転や戦後初の強制執行が行なわれている<sup>1)</sup>。また、戦後那覇市の都市計画に携わった石川栄耀は、沖縄の墓地と都市計画について、市街地に墓があることによってバスターミナルや公園を設置する条件が整っている、という考え方を示していた<sup>2)</sup>。つまり、墓地の移転が実現すれば、比較的大きな空閑地が発生し、公共性の高い土地利用を可能にすると考えたのである。このように、戦後沖縄における都市計画と墓地は、新市街をつくりだす〈生産〉と、移転や強制執行による〈排除〉の関係を生みだしてきた。

以上のことを踏まえつつ、本稿ではコザ（旧越来村）において戦後初めて

---

\* 立命館大学文学部地理学専攻 2012 年度卒業生

実施された都市計画（ビジネスセンター計画）に対し、墓地がどのような影響を及ぼしたかについて検討をくわえてみたい。つまり、①戦前から存在していた墓を取り壊して都市計画が施行されたか否か、次いで②センター通り周辺にどれだけの墓が立地しているのか。また、その際、墓の形態や大きさ、方角や環境などについても把握する。そして、③市街地化にともなって墓の取り壊しがどのように進められてきたのかを考察する。最後に、④当時の新聞資料を用いて戦後コザにおける墓地の状況や動向を概観してみたいと思う。

なお、戦後沖縄における歓楽街設置問題とビジネスセンター計画については、加藤政洋氏の『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』（フォレスト、2011年）や「ビジネスセンター構想と《八重島》」（『KOZA BUNKA BOX 第8号』、沖縄市役所総務部総務課市史編集担当編、2012年）を参照されたい。

第1表 使用した地図資料一覧

タイトル	出版社	発行年	所蔵
KURASAKUGAWA63	米軍	1940年代後半	—
KOZA64	米軍	1940年代後半	—
AGEDA78	米軍	1940年代後半	—
SHIMABAKU79	米軍	1940年代後半	—
センター都市計画図	—	—	沖縄市役所
コザ市（美里）住宅地図	沖縄慶文社	1968	沖縄市立図書館
ゼンリンの住宅地図コザ市・嘉手納村	沖縄住宅地図出版社	1970	沖縄県立図書館
ゼンリンの住宅地図（沖縄市北谷町）	善隣出版社沖縄支社	1980	沖縄県立図書館
ゼンリン住宅地図（沖縄市北谷町）	ゼンリン沖縄営業所	1993	沖縄県立図書館
ゼンリン住宅地図 沖縄市	ゼンリン沖縄営業所	2000	沖縄県立図書館
ゼンリン住宅地図 沖縄市	ゼンリン沖縄支社	2010	沖縄県立図書館

## (2) 資料と方法

まず、米軍が1940年代後半に作成した4800分の1地形図を用いて、ビジネスセンターが計画される以前の周辺状況を確認する。特に墓地がどこに立地・集積しているかについて、注目しておきたい。また、目的①を分析するために「センター都市計画図」と米軍作成の地形図とを比較し、墓地の分布があたえた影響を観察する。目的②・③については、現地調査や住宅地図を用いて考察を行なう。目的④は、『沖縄市史第九巻 戦後新聞編』を用いて記事を検索した。本稿で使用した地図や住宅地図は、第1表にまとめている。

## Ⅱ ビジネスセンター計画と墓地

本章では、ビジネスセンター計画がどのような地理的特徴のある場所に開発されたのかを、墓地に着目して考察する。ここでのポイントは、開発前から存在した墓地が取り壊されて新たな街区がつくられたのか、それとも墓地は取り残されたのか、ということである。

現在のビジネスセンター（パークアベニュー）付近は「沖縄市中央」という住所表記になっているものの、もとは胡屋集落の一部である。戦前の胡屋は純農村地域であり、胡屋十字路からコザ中学校に至る南側が集落の中心であった。ビジネスセンター付近の地理的特徴を示した新聞記事では、「“琉球よいとこ、石原小石原、琉球おじやるならワラジはいておじやれ……”といった様な民謡があつたがその通りここコザセンター街は戦前、石原小石原地帯で八島原と呼び何んのヘンテツもない殺風景なところ」であったとされている<sup>3)</sup>。つまり、ビジネスセンター付近には、耕作地や空き地が広がっていたと考えてよいだろう。

昭和7(1932)年12月末の時点で胡屋集落の人口は604、農業は主に砂糖や甘藷、米を生産している。しかし、「胡屋の土地は中ハギといわれ、地質は下であった」とされ、海外移住を志す住民も少なくなかった<sup>4)</sup>。

ここに、越来村が米軍側に提出したとされるビジネスセンターの設計図「センター都市計画図」がある（第1図）。この図については河角龍典氏が「ビジネスセンターの都市計画と地形景観」（『KOZA BUNKA BOX 第9号』、



第1図 センター都市計画図  
沖縄市史編集担当所蔵

沖縄市役所総務部総務課市史編集担当編、2013年）において詳細に研究されているのでそちらを参照していただきたいが、内容を整理すべく必要な点についてのみ言及しておきたい。

まず、この計画図はセンター通りと保健所通りを十字に直交させ、この十字路を中心に街区が配置されており、「実線で描かれる土地区画の情報」と「破線で描かれる土地区画の情報」が記載されている。「実線で描かれる土地区画の情報」は、「現在の土地区画や道路網とほぼ対応していることが判明」しており、店舗や住宅らしき区画にはA～Dまでの記号が振られ、さらに「A1」「A2」といった住所のような番号も示されていた。また、「破線で描かれる土地区画の情報」は、「開発以前の土地区画を示して」おり、こちらには「一三三五」「一五六八」のような漢数字が記載されている。

本稿で注目するのは、破線で描かれた土地区画内にひらがなやカタカナが記載されている区画である。これらの区画は、現在の墓の立地とほぼ一致しており、開発以前から墓地であったと考えられる。「センター都市計画図」内には、このような区画が50カ所確認された。

### (1) ビジネスセンター計画前の地理的特徴と墓地の分布

現在のパークアベニュー一帯における一番街商店街や保健所跡の周辺は一里根原（イチリンニール）、保健所通りの北側ならびにコリンザからセンター公園周辺は八重島原（ヤシマバル）と呼ばれ、いずれも胡屋集落の小字であった<sup>5)</sup>。戦前は、330号線からコリンザ方面へ行くほど丘や岩山が連なり、質の悪い畑が広がっていたようである<sup>6)</sup>。米軍作成の地図（第2図）をみると、ゴヤ十字路から北側のセンター通りの旧道までの間は、比較的平坦な地形であるが、それよりも北西側は等高線の密度が高く、岩山が分布している。

墓地は胡屋十字路以北の平坦な部分には立地せず、起伏のある丘や岩山の近くに散在している。沖縄の墓地は一般的に風光明媚な場所に立地すること



第2図 米軍作成の地形図と「センター都市計画図」

が知られており、亀甲墓などの墓の形態とも関係して、斜面の中腹につくられることが多かった。このように考えると、胡屋集落の中心部（ゴヤ十字路以南）から離れた、起伏のある斜面の中腹に墓地が分布していることは、戦前沖縄の一般的な慣習にもとづくものと言えよう。

## (2) ビジネスセンター計画の特徴と墓地の分布

旧越来村で実現されたビジネスセンター計画は、1948年3月1日に初代公選村長となった城間盛善のもとで進められていく。その設計図が「センター都市計画図」で、那覇市の都市計画にも携わる花城直政の手にかかるものであった。

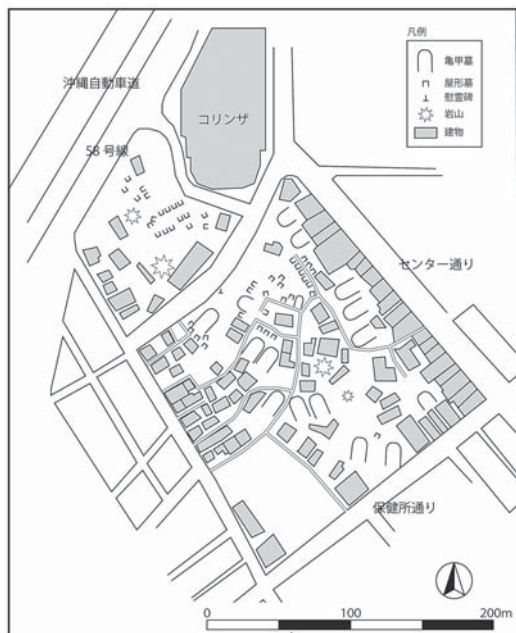
第2図は米軍作成の地形図に「センター都市計画図」をトレースしたものである。これをみると、センター通りと保健所通りを中心に、その両側に小さな街区を設け、裏通りも設置されている。しかし、それらが配置されている場所は比較的平坦な部分であり、丘や岩山・墓地が分布するセンター通りと保健所通りの十字路の北西ブロックには、裏通りを設けた街区はみられない。これは、丘や岩山を整地することは物理的に困難であることと、墓地が多く分布するために、このブロックの区画整理は行なわれなかったものと考えられる。

つまり、ビジネスセンター計画では墓地を撤去・移転することはなく、むしろそれらを避けるようして計画が進められたことになる。

## Ⅲ センター通り周辺の墓地の分布とその特徴

本研究では、センター通り周辺の墓地を3つのブロックに分け、1基ごとの立地と形態、方角、建設年、環境などを調査した。Aブロックはセンター通り以西・旧保健所以北、Bブロックはコリンザ以东・コザ小以西、Cブロックはセンター公園周辺である。

第3図は、Aブロックにおける墓地の分布を示しており、第2表は墳墓数や建設年をまとめたものである。Aブロックの中心部には岩山があり、それを取り巻くように大きな亀甲墓が立地していた。センター通りに面する建物のすぐ裏手にも、大きな亀甲墓がみられる。戦前、これらの墓地は旧道に沿って並んでいたものの、商店用のスペースを確保するために、現在のセン



第3図 Aブロックにおける墓地の立地

第2表 Aブロックにおける墳墓数と建設年

亀甲墓	屋形墓	墳墓数合計	慰霊碑			
15	40	55	1			
建設年						
1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	
6	4	1	0	0	2	

ター通りは少し東側につくられたと思われる。

コリンザの南にある墓地は、岩山に挟まれるような形で集積している。建設年が1958～1960年に集中しているので、墓地建設業者等による計画的な開発があったとも考えられる。全3ブロックの中で最も市街地に近い墓地であるが（むしろ、そうであるがゆえに）、墓地の周囲に柵を設置していたり





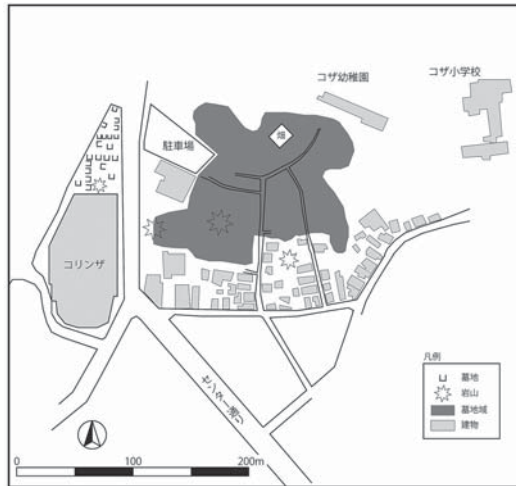
第4図 センター通り裏の墓  
(2012年8月7日筆者撮影)

(第4図)、通路の確保や清掃がなされているなど、良好な環境が保たれている。

Bブロックでは、A・Cブロックに比べると、平坦な地形に墓地が乱立している。墳墓数と建設年をまとめたのが第3表である。現地調査により墓地の立地を特定しようと試みたが、雑草が繁茂し通路も細く、スプロールの建設されているため、1基ずつ図に示すことはできなかった(第5図)。

サンプリングした建設年からは推測できないものの、比較的新しい墓地が多いので、Bブロックでは戦後に墓地が建設されたものと思われる。また、わずかながらではあるが畑も残っており(第6図)、現在の墓地や駐車場、そしてマンションは従前の畑が転用されたものと推測できる。那覇市識名霊園周辺の墓地と同じように<sup>7)</sup>、戦後、墓地がスプロールの建設されてしまう背景には、農業のできなくなった畑の地主が土地を細分化し、墓地として手放したことが関係している。

第7図はCブロックにおける墓地の分布を示しており、第4表は墳墓数や建設年をまとめたものである。センター公園は丘をそのまま公園にし、頂上に展望台を設置している。センター公園の東側は急斜面となっており、市内



第5図 Bブロックにおける墓地の立地

第3表 Bブロックにおける墳墓数と建設年

亀甲墓	屋形墓	墳墓数合計	慰霊碑			
12	206	218	0			
建設年						
1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	
4	3	3	0	0	0	

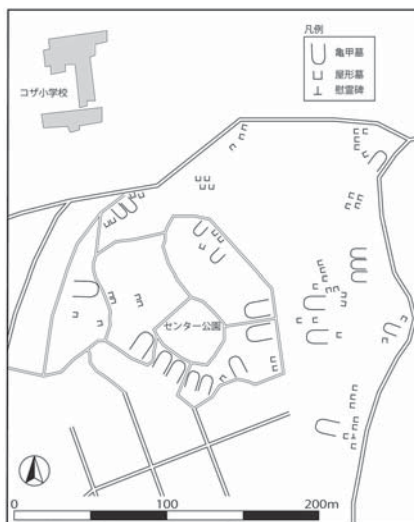
を一望できる高台になっている。このような地理的条件のため戦前から亀甲墓などの墓地が現存している。全3ブロックの中で最も亀甲墓の割合が高くなっており、古くから葬送の地として認識されていたことがわかる。

以上、本章では、センター通り周辺の墓地の分布とその特徴について、3つのブロックに分けて述べてきた。ここで各々の特徴をまとめ、簡単に比較しておきたい。

戦前から墓地として認識されていたのは、AブロックとCブロックである。このことは、丘や岩山の斜面に墓地が建設されていることから判断できる。さらに、聞き取り調査により、Aブロックは胡屋集落の墓地が多いこと、



第6図 墓地内の耕作地  
(2012年8月7日筆者撮影)



第7図 Cブロックにおける墓地の立地

第4表 Cブロックにおける墳墓数と建設年

亀甲墓	屋形墓	墳墓数合計	慰霊碑			
22	52	74	1			
建設年						
1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	
1	0	1	1	1	0	

Cブロックは嘉間良集落の墓地が多いことが判明した。

それに対して、Bブロックにも戦前から墓地があったと思われるが、現在のようにスプロール的に立地していたとは考えにくい。人口増加や市街地の拡大により墓地の用地が少なくなったため、屋形墓のような小さな墓地ができ、それがBブロックに密集したのである。さらに、地主が畑を細分化し墓地として売買することによって、現在のようにスプロールした景観が作りあげられていったのであろう。

事実、1959年の新聞記事では、Bブロック付近だと思われる地区に墓地が急速に造られていると言及されている。すなわち、「コザ市センター区北側の部落はずれには、ここ一、二年で数十基のスマートな墓がひさしを並べてつくられ人家と墓が一つの集落を形づくった感じ」であったという<sup>8)</sup>。このように、戦後形成された墓地スプロール地帯は自然発生的に墓地が集積した結果であると思われるが、建設された場所自体は計画的に選定されているのである。

#### IV 市街地化による墓地の立地変容

本章では、市街地化にともない、どのように墓の取り壊しが進められてきたのかを考察してみたい。資料として1968・1970・1980・1993・2000・2010の各年版の住宅地図を用いて、墓地区画の用途を分析する。

結論を先取りすれば、センター通り周辺の墓地は、1カ所を除いて1968年以降、一度も取り壊されていないことが明らかとなった。戦後、急速に発展してきた新興の街であるため、空き地や畑は墓地へと変容し、増加の一途をたどってきたのである。

取り壊された唯一の事例は、センター通りの北端、商業施設コリンザの地区である。センター通りの写真や住宅地図から判断すると、1972年前後まではセンター通りの北端にクラブやバーが立地し、背後には岩山があった。し

かし、1980年の住宅地図では岩山がなくなり、1993年の住宅地図では「パークアベニュー有料駐車場」となっている。その後、1997年11月にコリンザが開業した。コリンザの建設に際して、北側に位置する墓地の一部が取り壊され、取り残された残りの一部はコリンザの敷地に組み込まれている。第8図をみると、たしかに墓地が建設されている岩山の断面が見え、意図的に取り壊されたことがわかる。

また沖縄県では、墓地の新設や火葬場の利用の際に必要な「墓地等経営許可申請」に関して、その許認可権を県から各市町村へと移譲する事業をすすめている。第5表は2009年度以降に権限の移譲が行なわれた市町村をまとめたものである。この背景には、核家族化などによって墓地の需要が高まり、各市町村の地域的特性に沿った墓地経営を求める事情があった。

他方、墓地の無縁化の問題も顕在化している。今回の現地調査でも、明らかに無縁化した墓地が1カ所みられた。立地の変容のみならず、墓地自体の変容（無縁化）にどのように対応していくのかも、今後の課題となるであろう。



第8図 取り壊された岩山  
(2012年8月7日筆者撮影)

第5表 墓地等経営許可申請の権限移譲が行われた市町村一覧

権限移譲年度 (平成)	市 町 村	合計
21	南城市・大宜味村・恩納村・伊江村・座間味村・粟国村・渡名喜村・南大東村・北大東村・伊是名村・久米島町・与那国町	12
22	宮古島市・国頭村・東村・宜野座村・伊平屋村	5
23	金武町・読谷村・中城村・竹富町	4
24	うるま市・沖縄市・宜野湾市	3

## V 戦後コザにおける墓地の動向

本章では、都市計画的な視点から、戦後コザにおける墓地の状況を概観する。沖縄県における墓地は土地も含めて個人が所有するため、散在する墓地を整理・統合することは極めて困難である。また、住宅と墓地が混在する景観が、しばしば社会問題として表面化している。戦後のコザは「基地の街」として急速に市街地化する一方で、墓地もまた市街地を侵食し、その数を増やしていくのである。

ビジネスセンター周辺において墓地のスプロール化が見られることは、すでに述べたとおりであるが、それがいつどのような社会的背景のもとで進行したのかは定かでない。しかしながら、墓地の増加やスプロール化が見られる以前から、墓地整理がなかば強制的に行なわれていた。例えば、「コザ中央病院の向い、八二二部隊ではグラウンド新設のため」に墓地のクリアランスが計画されており、役所への「通知なき場合、合同葬にする」ことも検討されていた<sup>9)</sup>。また、「現嘉手納航空隊用地内にある墓は来る十月十五日迄に取り片付けるよう軍より知事宛」に通達があったことも判明している<sup>10)</sup>。

このような墓地整理に際して、実際どれほどのクリアランスが行なわれたのかは不明であるが、米軍側が強制的に墓地整理を実行していた証左となろう<sup>11)</sup>。ただし、米軍側も、各市町村や琉球政府側に墓地を取り壊す通達を出

さなければ、墓地のクリアランスを実行できなかったとみることもできる。基地内においても、墓地という空間は侵すことのできないものだったのだろうか。

終戦直後から1950年頃まで墓地の強制的な整理や撤去がなされたものの、1955年以降は一転して墓の建設が増加している。1959年の『琉球新報』・『沖縄タイムス』の記事には、「お盛んな“墓づくり”」<sup>12)</sup>、「ブーム! 『墓のアパート』」<sup>13)</sup>という見出しのもと、墓づくりブームの経緯が以下のように語られている。

「現在、墓づくりの盛んになってきたところは、ほとんどが軍用地に接収された地域で、浦添、宜野湾〔、〕嘉手納などの一号線に面したところや、コザ、北谷などの基地をもったところ」である<sup>14)</sup>。また、その特徴として「従来の墓は人里はなれた原野や山すそにつくられていたのが、ここ二、三年来、次第にその距離をちぢめてきて、ついに民家と隣り合わせ」でつくられている<sup>15)</sup>。このような、基地周辺の地域で墓が増加している原因は、軍用地と一緒に墓地までもが接収され、新たな墓をつくらなければならないという状況において、強制的に「取り壊された墓の補償金でつくりかえたり」<sup>16)</sup>、「軍用地料が支払われて金めぐりがよくなったこと」<sup>17)</sup>が関係しているようである。また、墓が「人家に接近するようになったのは軍用地に多くの土地をとられたためと、戦後“墓はこわい”という観念がなくなったことなど」<sup>18)</sup>が理由とされている。

一方、「生活の簡素化、合理化を目標にして叫ばれる新生活運動とは、これまたうらはらの感もする」<sup>19)</sup>とあるように、「墓地へかける費用や衛生面から今後は墓に対する従来の考え方を捨てて合理的な墓、葬式に改めなくてはならない」<sup>20)</sup>といった社会問題としても取り上げられていた。

墓地が急速に増加しているなかで、「本格的な都計にのり出そうとするコザ市にとってはこのブームにいささか手こずって」いた<sup>21)</sup>、すなわち「墓地が住宅地域に入りこみ、なかには将来都市計画上、利用価値の高いところに

もどしどし造られ、「都計に支障を来たす」<sup>22)</sup>と懸念されたのである。そこで、「墓地地域を選定し、墓づくりを都計の中におりこもうと」検討をすすめ<sup>23)</sup>、墓地を1カ所に集める墓地公園・霊園計画の策定を推進してゆく。

この墓地公園・霊園は、「①既設の墓地の密集地を優先し、②宅地化する恐れのないところ、③地理的配置を考慮する」という条件のもと、候補地として「中央高校付近、桃原区付近、ライカム貯水横付近、園田区裏手、トイジシ公園付近、保健所裏手、センター区裏手、安慶田室川方面、八重島区裏手、火葬場一帯」が挙げられている<sup>24)</sup>。そして、「八重島区裏手」が、第一号墓地地区として指定された。これ以降の墓地地区の指定は不明である。

## VI おわりに

本稿では、センター通り周辺の墓地の立地とその変容について考察してきた。得られた知見をまとめるならば、以下のようになる。

- 1) 対象地区は、戦前から胡屋や嘉間良集落の墓地であり、ビジネスセンター計画の際、墓地は取り壊されることなく計画が進められた。
- 2) 現在の墓地の分布は戦前から墓地が集積していた地区と、戦後畑や空き地が墓地として開発され集積が進んだ地区との2つに分けることができる。
- 3) 市街地化にともなって土地の高度利用化が進んだものの、墓地は取り壊されずにほとんど現存している。

また、新聞資料から戦後コザにおける墓の増加は、米軍基地との関係が深いことも明らかとなった。市域の大部分を接収され、狭い土地に住宅と墓地が混在せざるを得ない状況がつくりあげられ、軍用地料や取り壊された墓の補償金で墓地を新たに建設する「墓づくりブーム」がみられたのである。本稿で言及したBブロックは、明らかにこのブーム期に開発が進められた墓地であり、その結果、現在のような墓地のスプロールの集積地が形成されたわ



けだ。

しかし、このブームに携わった人々（例えば、土地を提供した地主や行政の対応）についての資料や情報が少なく、現時点では、軍用地料や取り壊された墓の補償金で立派な墓を造り、「余裕がでた象徴」として墓地が増加してきたことのみが明らかとなったに過ぎない。今後の課題として、コザにおける「お墓ブーム」期の土地提供者に関しても、聞き取り調査等を実施し、その過程を明らかにする必要がある。

さらに、「さいきん中部でも“お墓ブーム”がみられるようになった」<sup>25)</sup> という一文からもわかるように、那覇市では中部よりも先に「お墓ブーム」が到来していた。新聞記事の見出しで「お墓ブーム」の文字が最初に掲載されたのは、那覇市が1956年で、中部においては1959年である。3年という時間の差はあるが、戦後沖縄における第一・第二の都市で同じ現象がみられることは非常に興味深い事実である。

しかし、那覇市と中部における墓地の受容と供給の関係やその背景は、すべて共通しているとは限らない。本稿で明らかになった視点として、中部においては軍用地料等によって「余裕がでた象徴」として墓地を求めたことが挙げられる。これは、恒久的な米軍基地が設置されなかった那覇市ではみられなかった点である。今後、那覇市と中部における「墓地ブーム」の社会的背景を考察し、その差異を明らかにするとともに、なぜ「墓地ブーム」が起これなければならなかったのかという問題を追求してゆきたいと思う。

[付記] 本稿は、2012年度立命館大学文学部地理学専攻開講科目「アドヴァンスト野外実習」（担当：加藤政洋）における調査・研究の成果、ならびに2012年9月24日に開催された「戦後沖縄の基地・都市」研究会（於：立命館大学衣笠キャンパス学而館第3研究会室）における発表「ビジネスセンター計画とその地理的特徴—墓地・岩山・風水に着目して—」の内容にもとづいてまとめたものである。

## 注

- 1) 大濱聡『沖縄・国際通り物語——「奇跡」と呼ばれた一マイル——』ゆい出版、1998

- 年、341頁。
- 2) 石川栄耀「沖縄雑記」新都市7-4、1953年、21～27頁。
  - 3) 『琉球新報』1954年8月6日。
  - 4) 沖縄風土記刊行会編『沖縄風土記全集 第三巻コザ市編』沖縄風土記刊行会、1968年、79頁。
  - 5) 胡屋誌編集委員会『胡屋誌』沖縄市胡屋共有会、1994年、16～19頁。
  - 6) 『沖縄タイムス』1956年9月25日。
  - 7) 岡本啓介「那覇市識名周辺地域における墓地の形成過程」立命館地理学25、2013年、1～14頁。
  - 8) 『沖縄タイムス』1959年5月24日。
  - 9) 『沖縄タイムス』1949年12月3日。
  - 10) 『沖縄タイムス』1950年9月19日。
  - 11) このような事例は、同時期の那覇市においてもみることができる。
  - 12) 『沖縄タイムス』1959年2月11日。
  - 13) 『琉球新報』1959年3月29日。
  - 14) 前掲13)。
  - 15) 前掲12)。
  - 16) 前掲13)。
  - 17) 前掲8)。
  - 18) 前掲8)。
  - 19) 前掲13)。
  - 20) 前掲8)。
  - 21) 『琉球新報』1959年11月13日。
  - 22) 『沖縄タイムス』1959年8月29日。
  - 23) 前掲21)。
  - 24) 『琉球新報』1960年9月8日。
  - 25) 前掲12)。